

身体変工——身体観の博物誌

山本 芳美 (一九九〇年度卒・文化人類学ゼミナール)

はじめに

社会人類学を専攻する大学院への来年度の進学が決った。卒業を提出した後、受験勉強に忙殺され、研究テーマを真剣に検討する機会を十分に得られなかった。私の抱いていた大学院での研究テーマは、「からだ」を文化・社会の脈絡で考える、という大変漠然としたものであった。そのため本稿は、大学院で研究を行う際の足掛りを得る研究ノートとしたい。『フォーラム』の場をお借りして、まず一九九〇年度の私の卒業論文を当初のテーマの論点が明瞭になるよう再構成し、批判的に再検討し、今後の課題の展望を得たい。

序 章

第一節 問題の所在

本稿では、身体変工の個々の事例を支える「目的」の分析を課題とする。「なぜあることをするか」を理解させてくれる説明は、その行為の「目的」とも「理由」とも「動機付け」、「意味付け」とも表現できるが、ここでは、「目的」で代表させる。先ずは民

族誌の中から事例をさぐり、身体変工をおこなう人々の説明を中心に据え、検討を加えていく。

この観点から、過去の研究に二つの問題点を指摘できる。第一に、事象の記録と研究者自身の見解を分別せずに記述してきたこと、第二に、「目的」に対する分析を一方的におこなってきたことである。その多くは、当事者の説明を無視したうえ、個々の事例を考慮することなく、既成の見解を無批判に当てはめてきたといえよう。(cf. 田川 1987)

以上二点を踏まえたうえ、本稿では、文献資料をもとに、身体変工の当事者レベルの意味づけを概観し、それに分析を加える。次節で身体変工を定義つけた後、第一章では、身体変工の目的を博物誌的に概観する。第二章では、一章でのまとめを踏まえておもに SEGER のスヤ・インディアンに関する報告から、動物性(≡自然)を避け人間性(≡文化)を獲得するために変工をおこなう事例を考察する。第三章では、民族誌から離れ、こうした傾向が我々の「文明社会」にも認められることを指摘し、結論においては、私の現時点での認識をまとめたい。

なお、取り上げる地域はヨーロッパ、メラネシア、ミクロネシ

ア、日本、アフリカと南アメリカの一部等である。

第二節 身体変更の定義

この論文では、身体変更を「多少なりとも永続的な変形を狙った何らかの外的な力から、だに意図的に加える行為」と定義する。文化人類学の研究対象とされる身体変工には、イレズミ、癍痕文身、割礼、去勢、頭蓋変形、纏足、歯牙変工（尖歯、削歯、抜歯）、首の伸長、穿孔等、様々なバリエーションがある。私たちはこれまで、このような「エキゾチック」な現象のみを取り上げ身体変工として括弧に括ってきた。しかし、そうした行為と、現代社会の整形手術、下着による体型補正、整髪、髭剃り、脱毛、爪切りや場合によれば化粧も含めた「身だしなみ」は、程度の差こそあれ、全く同質だといえる。私たちは身体変工を、今まさにおこなっているのだ。（cf. BRAIN 1979, ヲコフ & ヴドーン 1988, 西江 1986）

では実際、身体変工は、どのような目的で、どのようにおこなわれているか、その多様さを次章で概観する。

第一章 「目的」の博物誌

第一節 身体装飾と身体変工

人類学の観点からの身体変工 (mutation, deformation) の研究は身体変工という用語と同時に「身体装飾」(body decoration, body ornament) あるは「身体芸術」(body art) の題目でも行われている。

「身体装飾」の字義通り、身体変工は自らの美意識に沿ってお

こなう例がかなりみられる。たとえばオーストラリアでは、哀悼傷身のほかに焼灼と傷痕、二種類の皮膚装飾をおこなう。BRAIN は、その目的は娯楽以外のなものでもなく、模様も個人の趣味を反映すると報告している。（BRAIN 1979）

男性の顔と女性の腹部の癍痕文身で名高いアフリカのティブ族は、装飾目的の癍痕をおこなう。男性が好んで施す facial mark は、彼らによれば部族の表徴だが、人類学者の観察では、実際は個性的で世代ごとに流行があるという。（BOHANNAN 1986）

上顎の門歯を削るケニアのカンバ族は、部族の表徴を理由にあげる。だが男たちは少女に賛美されるよう、口と歯を美しくみせるために削歯をおこなっている。また唾を下歯のすきまから芸術的に飛ばせることも重要な目的だった。（西田 1989）

第二節 様々な目的

しかし身体変工の理由、目的を身体装飾の面だけでとらえるのは狭すぎる。身体変工をおこなっている人々の語る目的は、実際多種多様である。

抜歯習俗はアフリカ、オーストラリア、ポリネシア、マレー、インドシナ、アメリカ、中国、台湾と広く分布している。宮内の報告によると、台湾の高地民族が行う抜歯には、歯の欠けた箇所を通して舌の先がちらちらするところをたいへん愛嬌を感じる美容上の目的があるほか、成年の表示や八重歯を防ぐ等の目的もある。ヴァン族では発音のためで、抜歯していない者はヴァン語の発音がうまくいかないという。タイヤル族では、女性が頬のイレズミの際、苦痛を弱める効果があるとして抜歯をおこなっていた。

(宮内 1940)

若者の体内に宿っている生氣をもたらず精靈に呼吸の道をあけるため、ケニアのバンツー系農耕民チャガ族は下顎の門歯を二本抜き、上顎の二本の門歯を真ん中から左右にひらくよう加工する。同じ目的で南アフリカ東海岸のバンツー系農耕民トンガ族や西南部の牧畜民ヘレロ族は逆に上顎門歯を抜く。(討論 1971)

人類学では有名なアフリカのドゴン族は、口を織機のシンボルとし、そこから最初の言葉が織り出されてきたとしている。ドゴン族には、祖霊である *Nooni* の歯と歯の鋭い先端のすきまから引き出された糸が、話し言葉の始まりであるとされる神話がある。彼らのおこなう歯牙変工と女性が下唇の中央部につける鳥の爪のような金属は話し言葉の由来を忘れないようにするためのものといえる。(和田 1989) また、女性の鼻と下唇につけるリングは、その時もちいられた糸巻きと織機に下糸を通す杼をあらわしているところ。(POLHEMUS 1989)

HANDY が Berchon の論文から引くとところによると、マルケサス島の女性は一二歳になると右の手にイレズミする。それは *popoi* を調理し、それを食べるためと、死体にココナツ油を塗るためである。HANDY はマルケサス島のイレズミの目的は身体部位によって異なるともいっている。イレズミした手は *popoi* をこね、食べるときに人目をひくためである。腕の裏側の部分の文様は、戦闘用のこん棒の柄を振り上げたときに映える。肩と腰イレズミは、背中へ腕を交差させて歩くときディスプレイ効果がある。ひざの内側のまるい文様は、足を組んですわるとき目立つようにするためだという。反対にももの内側は腰布をつけ

るが、イレズミはおこなわないところ。(HANDY 1922)

SMEATON の報告によれば、イラク族では、装飾と呪術的・医療的な目的の二種類のイレズミがおこなわれていた。

通常、医療的なイレズミは、捻挫に施した。頭痛・眼病に対してもおこない、その際イレズミを、頭や額、目のふちにいれた。また、局部的な皮膚病や痛みを治すためのイレズミも一般的で、特にリュウマチや風邪に対しておこなった。もっとも一般的な呪術的イレズミは、こどもの鼻先に一点をいれるものである。それは、死亡率の高い乳児を死から守るためにおこなったという。(SMEATON 1937)

東アフリカ・ケニア高地に住む、グシイ族を調査した松園は、割礼について、

割礼を体験しなければ少年も少女もともに一人前の社会成員になる資格を得ることはできない。グシイに生まれた子どもがグシイ人になるために必ずやらねばならない儀礼である。(松園 1982 p. 298)

と語る。グシイ族の少女は、初潮前の七―九歳になると自ら両親に、割礼(陰核切除)を受けたい旨を申し出る。両親は「痛いよ」「まだ早い」などと論じて、娘の決心を確かめる。万一逃げ出せば、娘はばか而非難され、両親は清めの供儀のために山羊か羊を差し出さねばならない。

施術は、割礼師が剃刀で陰核のさきを薄く切りとるものだ。痛みはあたえるがさして危険ではない。その後、一〇日から二週間少女は寢室に隔離される。割礼後、少女のステータスは、「少女

(egesagane)」から「未婚の女 (omoiseke)」または「割礼をうけた女 (enyaroka)」に変化し、一人前の仕事をまかされる。この畑や家での仕事は、楽しく価値があるとされ、やり遂げることで両親からも尊敬される。

割礼前の少女は、「少女 (egesagane)」と屈辱的に呼ばれ、少年の性的関心や攻撃の対象となる。仕事は、子守や牛の世話など半端なものである。少女が割礼を志願するのは、こうした状況から、抜け出し大人になりたいという理由からである。(BRIN 1982)

エジプト東部から、スーダン北部のドンゴラにいたるヌビア人は、若い少女に陰閉鎖 (infibulation) を施す。少女は、花嫁の装いをして施術にのぞむ。傷を癒すあいだ、娘たちは、花嫁や子を産む女性として扱われる。この施術は「少女を象徴的に清め、その清浄と多産を促進する」と信じられている。(BRIN 1979)

アフリカ、マリのドゴン族は、肉体的・精神的に女性と男性を分けるために、男女ともに割礼や陰核切除をおこなう。少女にとって陰核は象徴的な男性である。割礼をしなければ、陰核に宿る半分の男性的性格が産出を妨げるといふ。同様に男性も、包皮に半分女性的性格が宿る。男性はカミノリでの割礼によって、完全な男になる。(BRIN 1979)

割礼のほかにも、変工は女性の肉体的成熟と結婚に関連しておこなわれる場合が多い。南島のイレズミは年齢と階級によって文様が異なり、スーダンのヌバ族の少女たちは肉体的成熟にあわせ段階的に傷痕をつけていく。

南島のイレズミを比較研究した小原によると、それは女子の妙齢に達したしるしで、一種の成年式の意義をもっていた。また沖縄本島とその付近の諸島では結婚のしるしだった。「着物を作っても後でなくなるからイレズミだけはさせておかなければ」といって、親たちはイレズミ師を呼んで娘の手にイレズミを施し、祝ってやった。(小畑 1962)

身体変工は、男女ともに異性から結婚相手の条件として好まれる場合が多い。変工を済ませねば、結婚相手として承認されない。イレズミは沖繩・アイヌの女性、台湾、マルケサス、サモアの男性の、癍痕文身は主にアフリカの女性の条件とされる。割礼はアフリカ、アラブの男女双方の条件となり、台湾や中国では抜歯をはじめとする女性の歯牙変工が好まれる。

インド、ミーザール地区のドウドヒとシンラウリ階級の女性は額、頬、首、胸、背中、腕、もも、脚にイレズミする。イレズミは普通結婚前にうけるが、男達はイレズミの無い女性を「イレズミのない女は私たちの一員ではない。イレズミは女の証しだ」といって妻に望まない。イレズミは、若い女の人生にとって重大事であり、社会的成熟へのステップでもある。施術が終わると彼女は、より美しくなったと考え、それ以上に、もう少女でなく成熟した女性なのだと思ひ幸福感にひたる。イレズミのしるしは、完全に一人前になった女性の輪に加わる地位をあたえるのだ。

(MATHER 1964)

ニュージーランド、エスキモー、シリア、エジプト、チュニス、アメリカ太平洋岸のインディアン諸族、ソ連少数民族のチュクチでは、思春期におこなう女性の頬のイレズミは結婚を意味する。

ニュージーランドでは男女とも思春期におこなうが、女性は主に唇と頬にされる。(JENKINSON 1908-28)

アフリカの全域にわたる女性の癩痕文身(ケロイド)は、性のよろこびを高めるという理由でおこなわれている。男は、少女の背中・胸・腕にほどこされてある癩痕文身を撫でまわすことによって快感を得る。

ベニンのフォン族の少女は、初潮の直後に最初の切込みを行う。からだの各部に応じた切傷のパターンがあり、そのそれぞれに名がある。施術は専門家がおこなうが費用は婚約者が支払う。性行為の意味をもつのは、「ドゥミドゥ」または「ズイドゥ」とよばれる両もも内側にある傷痕で、九つのちいさな並行間隔の切傷が九列にならんでいる。それらは「わたしを押しして」という意味をもつ。(和田 1982)

須藤の報告によると、女性の性器伸長は、サタワルからモートロックにかけてのトラック語系社会に共通しておこなわれ、なかでもブルワット・ボンナップとトラック諸島で発達している。小陰唇は花弁にたとえられ、理想的には「ひらひら」の状態に伸長変工することが女性の「たしなみ」であった。(西澤 1989)

アフリカのディディングガ族は隣接するタボサ族との牛略奪をめぐる争いが耐えなかった。敵を殺すと上腕にぐるりと輪の形に点刻をいれた。殺した敵が男なら右腕に、女なら左腕にいれ、点刻の数が多ければ多いほど戦士として敵に恐れられた。(吉田 1982)

哀悼傷身は、身近な人の死の際、哀悼の意をあらわすために、顔を傷つけたり、断髪、手指や耳の切断をおこなうことである。

台湾では男女とも結婚に先立ち上顎の切歯を抜いて交換し、父母の死に際してはさらに二歯抜いて棺の中にいれたという。ポリネシア、ハワイ、トンガ群島も哀悼傷身として、抜歯をおこなった。ハワイでは首長の死、あるいはその他の痛ましい出来事への服喪のしるしとして、女性の舌先にイレズミをする。王の葬式の際に、女たちは、深い悲しみを表すため前歯を打ち欠き、赤く焼けた石で顔に焼灼を施した。(BRATN 1979)

第三節 多様性と普遍性

このように身体変工は、概観しただけでも、装飾、部族の表徴、呪術、医療、肉体的成熟、結婚、哀悼、性、成年の表示の目的のほか神話等に関連しておこなわれている。この他にもあるかもしれない。

身体変工の理由・目的を、樋口は以下のごとくまとめている。

- 一、本能的欲求(美的本能的、性的本能的)
- 二、実用的欲求(防衛、保温、カムフラージュ、隠蔽等)
- 三、信仰的欲求(マジック、タブー信仰的象徴)
- 四、表示的欲求(名誉、勲功、経歴、階級、知能、勇氣、社会的地位、経済力、年齢、婚姻、職業、姓名、種族、性別、トーテム、信仰等の表示)

(樋口 1989, pp. 4-5)

これほどまでに、各民族、集団ごとに「目的」は多様である。にもかかわらず、いずれも皆「からだ」に執着し、「からだ」に何かしら手を加えて生きている。「からだ」に固執することこそが共通しているのだ。あたかも「そのままの(生まれたまま、

「自然」のままの姿でいてはいけない」と思い詰めているかのようだ。序章で述べたように、「文明人」や「現代人」が「裸体」と認識するからだの状態でさえ、それと気づかぬ形で、実は変工を加えているのだ、西江は、これを「本当に裸の人間はいない」と表現する。

無としての裸体はあり得ず、現実の世界に一般的にみられるのは、何らかの形でその人物の属している土地の社会的意味が付けられている社会的身体でしかあり得ない(西江 1980 p. 165)

では、私達が退ける「無としての裸体」には、どのような意味があるのだろうか。そして身体変工で得る「社会的身体」とは何を示すのか。それは「自然対文化」の対立に抽象化できそうだ。次章では、動物性(≡自然)を避け、人間性(≡文化)を獲得するために身体変工をおこなう例を中心に考察を進める。

第二章 人間対動物

第一節 動物性を厭う身体変工

一七六〇—一七〇年にかけて、イエズス会の修道師が、アマゾンのカドゥヴェオ族に布教をおこなった。彼がなによりも驚いたのは、カドゥヴェオ族が、顔に複雑なアラベスク模様を描くのに、一日の大半を費やしていることだった。彼は、人々があまり食事をとらないので、この時間を狩りや、食物の採取や、作物の栽培に使うべきだと主張した。また、顔の塗彩は、神の業を冒とくしている」と説教した。

カドゥヴェオ族の人々は、彼の主張に大変ショックをうけ、た

しなめた。「ばかなことをいうな。われわれが塗彩してなかったら、まるでジャングルの動物のようではないか」(POLHEMUS 1980)

このように身体変工はしばしば、動物、それもたんなる動物一般からでなく、ある文化のなかで、なんらかの理由で意識される特定の動物から人間を区別する目的で行われる。

たとえばアフリカのヌエル族を含むいくつかの部族は六〜七歳になると下の門歯をこわすが「私たちが歯を欠くことは、人間と動物を区別するためのものだ」という意見をもつ。(ニール 1983)

ニュージーランドのマオリ族は、唇と歯茎のイレズミを怠って赤い唇と白い歯のまましていると犬に似ているといわれてしまう。またカメルーンのバフィア族は傷痕をつけるが、彼らによると傷痕をつけるのは、豚とチンパンジーから人間をわけするためだという。スーダンのヌバ族は、人間と動物のあいだの絶対的な境界を、頭と身体を剃り、皮膚をなめらかにする人間の能力に置く。(EVIN 1979)

このような情報は、その人々が属する文化本来の文脈から切り離されて提出されている。それだけに接する私たちには、大変滑稽なものにおもえる。

なぜ動物と人間は区別されなくてはならないのか、その文化の論理(ロジック)を探らなければならない。また、ある特定の動物と区別するために身体変工をおこなうなら、その動物はその文化のなかでどのような位置づけにあるか、その文化の文脈において解釈しなければならぬ。(cf. ニール 1976)

次節では SEGER の報告をもとに、動物と人間の対立を強く意識するスヤ社会をとりあげる。南米ブラジルのスヤ・インディアンが身につける lip disc と ear disc は人を人として確立させ、人が動物と異なることを示している。

第二節 スヤ・インディアン

中央ブラジルのスヤ・インディアンは、男女ともに耳たぶを支える直径約8cmの木製円盤をはめこむ。男性の下唇にも孔を穿ち、同様に直径約7、8cmの木製楕円盤をはめこむ。そのため下唇は突き出している。lip disc なしで出かけることはないが、沐浴の際にとりはずす。儀式の際には新しい lip disc と ear disc をつける。

スヤ・インディアンの中で重要とされる能力は「聞く」能力と「話す」能力である。スヤの「聞く」(ku-mba)能力はスヤの道徳を「知り」、首長の訓示を「理解する」能力である。スヤの人々は社会的規範をうけとり、理解するのは耳であり心や頭ではないとしている。

また「話す」(Kaperni)能力は「言葉」と「訓示」をさす。スヤにとって「話す」ことと「無言」でいることは重要な社会的行動である。動植物と人間には「言葉」がある。「言葉」はそれぞれに異なっているが、人間だけが他の動植物の「言葉」を理解することができる。「日常会話」は老若男女すべておこなうが、「広場演説」はすべての成人男子がおこなう。「広場演説」には独特のリズムと決まり文句と場所とはなしぶりの様式がある。首長と儀礼専門家がとりおこなう「広場演説」のみ「全員が聞く訓

示」と呼ばれる。彼らの主要な義務は「訓示」を通して集団活動を調整することと紛争を解決することである。彼らが話すとき村のだけれもが「すべてを聞きとること」が必要とされる。

「聞く」能力と「話す」能力は高く評価されるが、「見る」能力はそうではない。「目」は危険で反社会的な位置にある。特異な「見る」能力は妖術者(waranga)だけがもっている。妖術者は普通の男が見えないものが見え、悪意のある噂や利己的な話を陰でこそそととする。妖術者は、天にある死の村や地底の人々の火や、遠くにいる敵のインディアンを見ることが出来る。

妖術者になるには、持ち物・食物の分配や、危険な時期や重要なときの性行為・食事の制限をおこなわず、また人の墓を踏みつけたり、妖術者と性関係をもったり、妖術者の死体に触れなければならぬ。

しかし、彼らにとっては妖術者になる危険は特別なものではない。父や首長や儀礼専門家の「訓示」を「聞かない」場合、彼は「よく聞かない者」であり、妖術者になる危険がある。スヤは、子供たちが「よく聞かなく」ても、大変寛大である。しかし思春期になると年上の人間や首長の「訓示」を「よく聞く」ことを要求する。

また、彼らは、動物をその「臭い」の強さによって分類する。動物は「強い臭い」「刺激臭」「おだやかな臭い」と3段階に分けられ「強い臭い」の動物は力が強く危険であるとされる。

「臭い」は人間の能力の体系に組み入れられていない。「聞く」「話す」「見る」は人間がもつ、またはもちうることでされる能力に組み入れられている。スヤ・インディアンのあいだで社会的に肯定

されている「聞く」「話す」能力は ear disc と lip disc によって磨きをかけられるのだ。「目」には装身具をつけられず、イレズミもできず、塗彩することもできない。鼻にも装身具はない。(以上、SEEGER 1975 により要約)

清水によれば、SEEGER は、別の書(『中央ブラジルにおける自然と社会』一九八一年)でスヤの人々の「臭い」の観念について報告しているという。スヤの人々にとって、狩りや漁の対象となる小動物、魚ほど「臭い」は薄く、強力な獣ほど「強い臭い」である。また人の身体から排出される、血、乳、精液、女性性液は「強く臭う」という。洗っていない女性性器は大便と同じく「腐臭」がする。

同様に、母胎内で精液を吸収して成長し、出生後も母乳で育つ新生児は、「強い臭い」とされる。命名という社会化の一步を経た子供はいくぶん「臭い」をうすめる。

その後、思春期に入ると、女性性は、性的に活発でなくなる老年期の前までは「強い臭い」の存在であり続ける。対して男性性は、一六、七歳で男宿に加入して以降「無臭」とされ、老年期になって、女性と同様「中臭」になる。「無臭」の独身男性は、できるときり食事と性行為を控え、歌の修得に専念すべきだとされる。この時期がスヤの人間性・社会性の理想である。男性が壮年になると、政治的には活発だが、人間性において一步退いている。老年期に入った「中臭」の男女は、社会的規範からいくぶん解放され、冗談・悪戯を習性とする。(以上、清水 1988 により要約)

第三節 人間であること

——手段としての身体変工——

スヤ・インディアンは、動物性と自らの人間観を「臭い」の観念であらわす。彼らの動物性の表現は、人間の「からだ」のある特定の箇所に集中している。

ある文化の人間は、その文化が定義する動物性を、「からだ」に含んだままこの世に生まれ落ちる。その成長過程は、人間の「からだ」に潜む、その文化が定義する動物性を薄め、そこで定める人間性を獲得していく道りである。身体変工は、人間性を獲得するきっかけや、条件となるのだ。

人間は、動物と人間の差異を意識し強調することにより、ようやく人間になることができる。人間観は、動物に対する人間、人間に対する動物、という二項対立思考に基づいている。動物との区別をなくすことであいまいな存在になることを、人は強く恐れるのだ。

人は、他者と自らに向けて、ある文化の文脈に沿って、こうした人と動物の関係を簡単明瞭に伝え、表現できる媒体を見つけた。それが「からだ」である。人は、人である以上誰もがもつ「からだ」に着目したのだ。「人間が人間であるために」姿かたちを変えていく行為、それが身体変工なのだ。

こうした人間観に基づく身体変工は、いわゆる「未開社会」でおこなわれることであり、我々の「文明社会」には関係ないと思われるかもしれない。だが、程度はともあれ「からだ」を「正す」ことで人間性を形成する「しつけ」に、身体変工のそうした傾向が認められるのである。次章では、「人間らしさ」への加工

である「しつけ」を中心に見ていく。

第三章 「人間らしさ」への加工

第一節 コルセット

ヨーロッパ世界では、十六世紀前後に、姿勢に対して異常に關心が高まり、(おそらくイタリヤから) コルセットの使用が始まったという。十六世紀中頃には、外科医が、くる病等の骨格の病的な湾曲を矯正・予防する目的で整形用コルセットを用意した。また同じころ「美的理想体型」に近づくための、婦人・小児用コルセットの使用が始まった。子供たちは、成長にともなう身体の歪みを心配した親から、より念入りに固められた。(堀江 1988)

十九世紀ビクトリア朝には、いわゆる小柄な女性(ふっくらと丸く、両ほほを巻毛が飾り、ウエストは細くくびれ、脚の小さい女性)が理想となり、コルセットが男女とも大流行した。(ハンター 1988) フランスでも一八二〇年から一八四〇年にかけて粹な男性のあいだにコルセットが流行した。

ウエストが細ければ細いほど女性の魅力は増し、結婚市場で有利になるように母親は娘をコルセット型に押し込み成型した。医師たちは結核、頭痛、ヒステリー、流産などあらゆる病名を挙げて反対したが、その反対はどこか弱々しかった。それは流行だけでなく、道徳の問題だったからである。(野木 1987)

当時、女性はコルセットをつけ身体を締めつけていないと、すぐ誘惑されてしまうような、道徳的に弱い存在ととらえられていた。コルセットをつけることは、道徳的に弱いやわらかなからだを型にはめることによって、貞操を守る確固とした身体に変える

ことだったのである。

同時にコルセットのゆるみは気のゆるみととらえられていた。婦人がゆったりとしたままの姿でいることは、なにもかも面倒で億劫になる第一歩としていましめられた。

コルセットがすたれていったのは、まったくの機能上の理由からだった。第一次世界大戦後、女性が労働に従事するようになり、女性にとって重荷となったのだ。

第二節 頭蓋変形

ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカ、中央アメリカ、南アメリカ、南洋の島々に人工的に頭蓋を変工する風習がある。(あつた)。

頭蓋の形を自由に変えられるのは、幼児の頭部がまだ柔らかく、各骨の縫合も癒合していない生後一年間である。この時期に母親は優しく手で圧迫したり、木製の円盤、平板で頭を縛って固定させて、頭が高く幅広く見える前頭後頭変形や、頭頂が鋭角になる頭頂後頭変形、短頭(いわゆる絶壁頭)をつくりだした。

例えば、南米のカリブ・インディアンは赤ん坊の額を後ろ上方に向かって傾斜する形にしたが、それは高貴で「ラッキーな」容貌にすると信じられていた。(ハンター 1988)

頭蓋変形はヨーロッパにもある。フランスのある地方では頭蓋変工を優生学的理由で行った。人々は子供の将来のありかたを頭脳の形を整えることで導びこうとした。イエズス会士の神父は、母親たちに子供を偉大な雄弁家にするなら、生まれたての赤ん坊の頭に手を加えることだと説教した。(ルペンヌキ 1979)

一九三〇年代ヒトラーの第三帝国では、優生種のスタイルとして長頭を推奨した。心配性の親たちはマッサージし、赤ん坊の丸い頭を長い頭に変えた。手を加えない「自然のままの」頭蓋は、脳の容器としては役立つが、記憶のための余裕はないとされた。当時、頭を長くすることは、記憶を保つことだと宣伝されていた。(BRAIN 1979)

第三節 緊縛産着

緊縛産着 (swaddling) も、弱く柔らかいものを正しい方向に導く、との発想のもとにうみだされた。骨が柔らかく胸部がもろい、という当時の子供観に基づいて、「歪みのない」直立した身体を造るのに効果があるとされた。

①ルネサンス期からヨーロッパで流行していたくる病にたいする恐れと、

②赤ん坊がO脚のまま将来まともに歩けるかどうか危惧したこともあり十六世紀にはヨーロッパ全体に広がっていた。十七世紀のフランスでは幼い生き物である子供を「人間化する」ための必須の手段であった。それなくしては幼児は獣のように四つんばいで這い歩き、まっすぐ立って歩くことを知ることはない。つまり親たちは、

巻き布姿の規則的かつ限定された子供の所作は、小動物の統制を欠いたばらばらな動きと相対するものである。(マーマン

1984 p. 75)

と考えたのだ。

十八世紀まで続いた緊縛産着は

まず髪と皺のたくさん入った厚いリンネルの下着を着せ、それから腕を胸の上に置かせて手足を固定し、折り重ねたリンネルを股のあいだに詰め込み、その上で首から脚まで包帯でぐるぐる巻きにするのだった。(鈴木 1987 p. 34)

現在でもルーマニア、ギリシャ、北イタリアの農民の間では、骨格の変形を防ぎ乳児の皮膚にほどよい刺激をあたえ情緒を安定させるとの理由で緊縛産着をおこなっているという。(頓本 1983)

第四節 身体観としつけ

これまでみてきた事例から、「弱く柔らかいからだを、文字どおりA造型することVによって、肉体的・精神的に正しい確固とした身体に変えなければならない」とする身体観が想定できる。

そのままのからだは、もろく柔らかく歪みやすい存在である。それを締め付けて変形することによりコントロールすることが、身体変工の効果として期待されるのだ。

コルセットや頭蓋変形・緊縛産着の狙いは、からだを確固とした身体につくり変えると同時に、その人間の内面に人間らしい規範を形成することにある。

コルセットや頭蓋変形、緊縛産着は私たちが今日漠然と「しつけ」や「紳士・淑女の」たしなみ」と呼ぶ規範が、たまたまはつきりと目に見えるかたちをとったものであると私は考える。

「しつけ」と「たしなみ」のために皆こぞってコルセットを身につけ、赤ん坊の頭をいじり、姿勢正しく人間らしく歩かせるために緊縛産着を着せたのだ。

「しつけ」はある文化を「身につけさせる」ことである。子供をしつけることで内的な規範を教えこむことはもちろん、しばしば動物のとらえられる、生まれたときにはまったく自由だったからだの動きを、ある文化で望ましいとされる動きの型へがっつきりと統制していく。そうすることで、より人間らしくふるまえるのだ。ある文化で生きる人間は、嫌が応でもその文化の特性を身につけてしまう。

コルセットによって歪んだからだを見極めることで、私たちが「身につける」文化なるものの根強さ、生きていくうえで切り離せない規範の拘束性がみえてくるのだ。

結論 身体変工と人間

これまでみてきたように、身体変工はある文化の、人間観、身体観、に基づいておこなわれている。それは、私たち人間が自然状態を脱し、自らのからだを用いて文化を構築し、文字どおり「体現」していく行為に他ならない。そしてこの根底には、私たちの、表現の素材としての「からだ」に対する強い執着が隠されているようにおもわれる。

私たちは一般に「からだ」に対して、「肉をまもっているが、硬い骨格に基づいた動かしがたいハ確固とした身体V」というイメージを思い浮かべる。しかし意識の底では、表現の素材になる「柔らかいからだ」イメージをもっているのではないか。そして、時代や地域により、柔らかさの度合に對するイメージも異なり、その度合いと身近な材料の種類により様々なバリエーションの身体変工を生み出してきたのではないだろうか。

ヴァン・ヘネップは

人間の身体は自分の好きなように切ったり手を加えたりする単なる木片か何かのごとく扱われて来た (ヴァン・ヘネップ、1977 P. 63)

と書きしるしたし、「からだ」を粘土やカンパスにたとえる者もいる。(cf. BRAIN 1979, ヒュンズキー 1979)

粘土をこどもの前にただ置いてても、興味をしめしていじりだすことはない。粘土の性質を教えると、こどもは粘土を使って様々な形を生み出していくという。

柔らかい素材は、不安定である。一度完成させても再度形作ることを誘う。作り出した形に対する満足度は個人により、文化により様々であろう。一度作り上げた形のまま過ごすものもあれば、際限なく造形を繰り返していくものもある。

私たちは誰に教わるでなく、「からだ」の媒体性を知っている。そして「柔らかいからだ」イメージに突き動かされ、「からだ」に変形を狙った何らかの圧力をかけるのだ。

そして広い意味で、「からだ」に対する身体変工行為は、医学の、特に生殖技術の発達により、今まで以上に徹底したといえる。「からだ」全体に及ぶ整形手術だけでなく、臓器移植、試験管ベビー、男女の生み分け、遺伝子操作なども、これから身体変工を語るうえで、視野にいれなければならない問題だろう。これまでは、「からだ」へ外的な力を加え、比較的ゆっくりと理想のイメージに近づけていた。だが医学の発展により、より完全な理想の身体イメージが表現するようになった。

生と死に関わる技術を用いて人が目指すものは何か。人間、身

体、家族構成、子供、親族等に対する、ある文化の理想が技術の力を借りて純粹な形で表れてくるとおもわれる。理想の生・死とは何か。誰が子供の親として適切なのか、生まれてくる子供はどのような子供で、性別は男女どちらでなければならないか。理想の家族構成はどのようなものか。遺伝子操作は、何を「正常」あるいは「異常」と判定し、「治療」対象にしているのか。そしてどのような事をおこなおうとしているのか、臓器移植にともない、身体は単なる「人体パーツの寄せ集め」にすぎないものとされていくのか。これらの問題から、現代の人間が抱く身体観や人間観がはっきりみえてくる可能性がある。(cf. タムナー・対「人離」と評 1989, 米本 1985)

生殖技術の発達により、これまで変工に縁のなかった赤ん坊ですら、すでに「社会的身体」をもって、この世に生まれ落ちるようになった。人は今や、人そのものを根底から変えだしたのではないか。

今後の展望

本稿は、身体変工の「目的」に秘められている原理のほんの一端をかいまたにすぎないことは明かである。卒業論文作成の時点では HRAF (Human Relations Area Files) の検索も行った資料は入手していたが、これを議論・考察に生かす余裕がなかった。先ず今後の課題として「博物誌」としては、より資料を拡充することが必要である。

この論文で触れた、「なぜからだなのか」という問題に関しては、「からだ」の媒体性を指摘するだけでなく、これからもっと

深いレベルでの考察がなされるべきだろう。

モースは、身体研究の古典的位置を占める「身体技法」の論文のなかで、

身体こそは、人間の不可欠のまた、もっとも本来的な道具である。あるいは、もっと正確にいえば、身体こそは、道具とまではいわなくとも、人間の欠くべからざる、しかももっとも本来的な技法対象であり、また同時に技法手段である。(ホーム 1976 P. 132-3)

と指摘した。「身体技法」研究に、生物学的・社会学的・心理学的な三重の不可分な考察の必要を、つまり「全体的人間」の視点をもつことを説く、モースの示唆はいまだに重い。

私は今後、身体変工がある社会のなかで果たす社会的機能にもっと目を向けていきたいと思う。ある一社会を取り上げ、詳細に丹念に調査し考察を加えたい。本稿で大いに参考にした SEEDER によるスヤ社会の研究のように、ある社会全体での身体変工の位置づけと、他の機能との相関関係、その象徴性まで読み解いていきたい。

研究史、地理的分布、通過儀礼との関連、南島や東アジア、東南アジア、オセアニアのイレズミに代表的にみられる身体変工と他界観との関係、スヤ・インディアン の事例でみてきたような身体変工の象徴性など今後考察すべき問題は山積みしている。そして同時に、現代社会に切り込む動的なテーマとして展開できる面がある。

現在の私は、結論で提起した、広義の身体変工ともいえる、生殖技術をはじめとする医療と人間との関わりにも非常に興味を感

じている。矛盾するようだが、私は卒論で、従来の「エキセントリック」な身体変上の現象だけを取り上げて分析することに行き詰まりを感じ始めていた。私にとって、卒論を書き進める過程で直面した生殖技術とその根底に潜む一種の優生思想は、非常に現代的でダイナミックな問題を研究の視野に収めることのできる一種の突破口だった。

「からだ」を通じた人間のイメージの具体化。これからのからだに潜む「委しへの欲求」を「からだ」を主体から捉えていこうた。

参考文献 (本文中に用いたものに限る)

- バインダー, P. 杉野田康子訳 1988 『ドレスアップ・ドレスダウン』岩波書店
- BOHANNAN, Paul 1956 "Beauty and Scarification among the Tiv", *Man* 56: 116-121
- BRAIN, Robert 1979 *The Decorated Body*, London: Hutchinson & Co. Ltd
- EVIN, Victoria 1979 *The Body Decorated*, London: Thames & Hudson
- ザンソ=ヘネツ, A.1977 『通過儀礼』弘文堂
- ゾルー・オ・女の人権と性 1989 『ア・ブ・オ・イ生殖革命』有斐閣
- HANDY, W. C 1922 "Tattooing in the Marquesas", *Bayard Dominick Expedition Publication* 3: 1-32
- 樋口清之 1939 「日本先史時代の身体裝飾 上」『人類学・先史

学講座 13』雄山閣出版

- 石川 登 1987 「男子割礼をめぐる諸解釈—検討と批判—」『文化人類学 4』Vol. 3, No. 1 テカデミア出版会
- JENKINSON, Constance 1908-28 "Tattooing", Hastingo, J ed. *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Edinburgh: T. & T. Clark
- ラコフ, R. T. & ジェール, R. L. 1988 『フレイヌ・ヴァリュエ—美の政治学—』ポラ文化研究所
- リーチ, E. R 1976 「言語の人類学的側面—動物のカテゴリーと侮蔑語について—」『現代思想』Vol. 4, No. 3
- リップス, J. E. 1988 『鯛と帽子と成人式—生活文化の発生—』八坂書房
- ルークス, F. 1983 「肉体—伝統社会における慣習と知恵—」マールジュ社
- MATHER, K. S. 1954 "Female Tattooing among the Tribes of Duhni", *Man* 54: 139-141
- 松園典子 1982 「女子割礼—ジン族の事例—」『民族学研究』Vol. 1, 47 No. 3
- モース, M. 1976 「身体技法」『社会学と人類学』弘文堂
- 宮内悦蔵 1940 「所謂台湾蕃族の身体変上」『人類学・先史学講座 19』雄山閣出版
- 西江雅之 1980 「裸になれないサル」『着る』平凡社
- 野村雅一 1983 『しぐさの世界』日本放送出版協会
- 小原一夫 1962 『南嶋入墨考』筑摩書房
- POLHEMUS, Ted 1988 *Body Styles*, London: Lennard

Publishing

- ルドフスキー, B. 1979 『みっともない人体』 鹿島出版会
- SEEGR, Anthony 1975 "The Meaning of Body Ornaments: A Suya Example", *Ethnology* 14: 211-224
- 清水昭俊 1983 『家族と身体の慣習』『家族史研究』第7集 大月書店
- SMEATON, Winifred 1937 "Tattooing among the Arabs of Iraq", *American Anthropologist* 39: 53-61
- 須藤健一 1989 『母権社会の構造』 紀伊国書店
- 鈴木 晶 1987 『締めつけることのアルケオロジー』『Is』 No. 37 ボーラ文化研究所
- 高橋統一 1971 『割礼と初潮』『現代のユスプリ』No. 60 至文堂
- 和田正平 1982 『黒いアフリカの皮膚装飾—傷痕・刺青・ボディアートインソグ』『化粧文化』No. 6 ボーラ文化研究所
- 1989 『アフリカにおける口もとの美』『化粧文化』No. 20 ボーラ文化研究所
- 米本昌平 1985 『ボディ・オックス』 講談社

(四月より明治大学大学院に進学予定)

「メン」

藤崎康彦

卒業論文のレベルでは、先ず資料探索を丹念に行ったことが評価できる。ただ、膨大な資料を全部は生かし切れなかったのは、本人も認める通り今後の課題である。論理構成の点では、この論文を再構成する過程で少し整理された。妥当な方向を見い出していると思う。

研究者の卵を指すなら、文章等も含めて作品としてまだ荒っぽいのが気になる。卒論作成時は時間の制約から推敲も十分でなかったとは思うが、一段思索を深めていることではもっと細かな配慮が必要だ。用語、概念が吟味されていないか（例えば「からだ」と「身体」）、表記が不統一であったりした。文体の勢は本人の特長であろうが、繊細な神経も持ってもらいたい。

今後の研究には私も期待したい。折りあたかも、いわゆる脳死臨調の最終答申が出された。死の概念・からだの概念・人の概念、それぞれが文化や社会の中で研究する必要があるものなのに、その面からの検討が遅れていることは確かなのである。